一五八五年　レッヂオ版

天正遣欧使節記〔訳文〕

岡本良知

一五八五年レッヂオ版天正使節記解題

A5版の扉共に九枚、本文だけでは僅かに六枚の汚いパンフレットのようなものが、昭和二十七年に重要文化財に指定された。東京国立博物館の一隅に久しい年月の間積み重ねてあった一群の古い洋書のうちから、昭和二十四年に図らずも見出された一書である。旧帝室博物館時代の大福帳式の台帳に照合して見ても、ただ明治三十二・三年頃に買入れられたと知られるだけで、その他のことは一切わからない。恐らくは博物館で何人の手にもとられることがなく、長年月の間極めて粗末に扱われて来たに違いない。表紙も失われ、扉の下半部には大きな汚染があり、各頁の隅々がだらしなく折れて、本全体が鼠色に汚れてしまっていたことから見て、そう想像するより仕方がなかった。

このパンフレットは北イタリヤのパドヴに程近いレッヂオという小邑で、エルコリヤーノ・バルトーリという人が今から三百六十七年前の一五八五年に出版した大友・有馬・大村三侯使節のローマ到達並びに滞在記である。その扉の文字は後に訳出した通りである。この一五八五年は、使節のフィレンツェ・ローマその他北イタリヤのボローニャ・ヴェネチヤ・パドーヴ、パルマ・ミラーノ・ジェノーヴなどを遍歴した年であり、その年にはこれらの各都市で数種のこの使節に関するパンフレット様の書が公刊された。また翌年と翌々年にかけてフランス、ドイツ、オーストリヤ、ベルギーなどでも、イタリヤで出たパンフレットがそれらの諸国語に飜訳されて寡なからず刊行されたから、一五八五年の使節記パンフレットというだけではひどく

珍稀なものではない。然しこのパンフレットに限って、他と同日に語れない種々の特別の価値を有っていることにわたくしは心付いた。その第一は、イタリヤの諸都市で出た冊子はどれも皆例外なく使節の往訪した処で、多分その紀念の意味で刊行されたらしいのに、この書だけは使節も行ったこともないレッヂオという餘り人に知られぬ小邑で出ていることである。但し刊行年記と並んで「上長の充許を得て」と刻されているところから考えれば、一個人の私版ではないようである。なお後に述べる如く、使節一行が、附近のパドーグを訪れた七月六日よりも二箇月餘以前の四月中に刊行が終っていることも異例である。そのようなわけで類を絶した書であると想われたので、今までに刊行された数種の目録には、これに就いてどのような記載があるかを調べてみた。すると、有名なパジェスの日本関係洋書目（一八五九年パリー刊）は勿論、バッケル及びゾンマーフォーゲルの耶蘇会関係書目（一九〇〇年パリー刊）にしても、コルディエーの日本書目（一九一二年パリー刊）にしてもこれを載せていない。更に博覧と精識とを以て信頼せられることの最も大きい浩翰なシュトライトの教会関係書目の第四巻（アアヘン一九二八年刊）を調べても、この書に一言も触れていない。蓋し、それらの信用篤い書誌書目に記載がないことは、古今を通じてこの途の学者にこの書の存在が、従って曾ってレッヂオで刊行せられたことさえも知られていなかったし、まだ今もなお知られていないことを証する。とすれば、この書が甚だ少部数だけが発行されたのかも知れない。この書と殆んど同じ内容で同じ書名の冊子が、この書より約三箇月遅れて使節往訪の際にヴェネチヤで出た。今から百餘年前にミュンヘンにあるその一本だけをパジェスが極めて稀購として記録したことがある。勿論レッヂオ版よりは発行部数が多かったのであろう。そのヴェネチヤ版でさえ現存一部が確認せられた程であるから、レッヂオ版のこの書が世に知られなかったのは決して怪しむべきではない。兎に角レッヂオ版使節記は八年前に初めて国立博物館所蔵の世界に於ける唯一本の存在がわかって来たわけである。

この書の特殊の価値とすべき第二は、この書のローマに関する記事が、使節一行の到着した一五八五年三月二十二日に始まり四月三日で終って、その間十三日間だけの公私の動静が伝えられていることである。そして四月七日以後の記事が全く見られない。殊に使節一行にとって最も重大な事件たる彼等少年使者達を己が子のように親愛し贔貴にした教皇グレゴリオ十三世

の四月十日に於ける逝去のことも載っていない。というのは、この書の原稿が四月四日から六日までの間に作られた事実を暗示する。巻頭の献呈辞によれば、その献呈辞の筆者パオロ・メイエットという人物が、その日付である四月二十三日より数日前に入手した。それを書いた処即ちパドーヴの大学内でこれを得たのか、それともローマで彼自身または他の何人かが入手してその数日間に北イタリヤのパドーヴまたはレッヂオへ携行したのかどうかは、メイエットのその数日中の行動が探知せられぬ限り明かにはせられない。然しながら、以上のことからでもその間の経過が次のように推察できる。この書の原稿が何人かによって恐らく四月六日までにローマで書き上げられ、それから何かの理由で四月中旬頃にパドーヴへ持ち出されて、そこでメイエットがそれを入手したか、または同じ頃にローマでメイエット自身若しくは何人かがこれを獲得して迅速にパドーヴへ携行したのであろう。そしてその四月中旬からその後の数日の間にメイエットがこれを印刷に附したが、それはこの献呈辞の日付の四月二十三日より後ではない。但しこの四月二十三日には印刷し了っていたかどうかを明かにせられないが。それでも献呈辞の字句より想像しても、また後に述べる如く、非常に急いで組版されたところから考えても、この書の刷り上って配付されたのは二十三日より甚だ距った後の日ではなかったであろう。少くとも四月中には出来上っていたと思われる。博物館本は表紙もとれてしまっているから、元来どのような外装を有っていたかわからぬが、多分それも極めて簡単なものではなかったか。

日本の少年使節に関する書のうちで、イタリヤで（即ちヨーロッパで）最も早く出版されたのは、この年三月二十三日に行われた教皇庁サラ・レジヤに於ける教皇への公式の謁見の儀を伝えるためにその日の彼我両方の代表者の口演の文が出版せられた小冊子であって、三月二十四・五日には印刷に附し、このレッヂオ版冊子の書き上げられたと推定される四月六日以前に公刊されていたことはわたくしが本文の註12に於て指摘する通りである。然しそれは公式文書を刷行しただけで、この使節の行程や動静には少しも触れないから、使節記というわけには行かない。その意味での使節記としてはこのレッヂオ版パンフレットこそは最初の出版物であった。蓋し、使節の公私の消息を語る最初の刊行速報記である点に於て珍重この上もない書とい

うべきであり、この年に出た多くの冊子の記事はこの書に倣って書かれ出版されたのかも知れない。

この書の特殊の価値とすべき第三は、組版印刷の体裁である。頁数字が付いていないし、行を改めずに記事の前後の関聯の如何にかかわらず、総て追い込んで組んである。但し最後の四頁だけに普通の書の通りに改行している。次にわたくしが本文の註で指摘した如く、地名・人名の誤植が多い。フィレンツェの新称とフィオレンツァの古称とが統一なく混雑して見えるのはその最もひどいものである。（蓋し今のフィレンツェ――英語ではフローレンス――がこの時代より餘り遠くない頃まではより完全な発音でフィオレンツァと称ばれていた故である。）

このような組版上の缺点や誤植は、想うにこの書の印刷を短期日に了ろうとして、植字を急いだために起ったのであろう。そして、その終りに近づいて幾らか時間上の餘裕が生じたかして、記事に改行が行われたのであろう。この事実は、今日の新聞や雑誌などとは違うが、兎に角速報を旨として出版されたことを語るのではないか。当時はヨーロッパで活版印刷術が発明されてから百三十年を経ていて、組版の技術もかなり進歩していたので、このような不備不体裁な刊書は出なかった。さればこの書は印刷出版史上でも一珍品たるを免れない。

第四はこの書の記事の内容に関することである。耶蘇会が日本で布教した三十年間の歴史を略叙し、九州の三大名の少年使節を派遣した経緯や使節の人物やを語り、それ以後に使節の長崎を発ってからヨーロッパへ着くまでの旅程、ポルトガル、エスパニャ両国で受けた歓待を簡略に伝えているのは他の多くの使節記と同様である。それよりもこの書の特色は一五八五年三月一日にリボルノへ上陸してからのイタリヤに於ける使節の動静の記事であろう。ピーザに於けるトスカーナ大公の歓迎、大公妃が少年使節の一人々々を抱擁したこと、聖灰の祝日にサン・ステファーノ大聖堂に於ける式典への参列、ウィレンツェに於て当代イタリヤ第一の美丈夫ヴィルシリオ・オルシーニの訪問を受けて交歓したことなどは、他の使節記やその他の記録に見えるところではあるが、この書の記事はそれらと趣きを異にするものがあって、委細の実状を察知するに資することが多い。ローマでは全市民から如何に注目され尊敬を受けたかを叙述し、公式の謁見式の翌三月二十四日に、教皇の礼拝堂でのミサに

招かれたとき、いささか疲労していた使節のために耶蘇会総長が教皇へ執り成して一日の休養を請うたというような他の記録にないことなどをも報じている。その他に、少年使節達の服装、日々の慣習などにも他書の伝えぬものがある。

最後にこの小冊子の著者に就いて考えてみるに、その記事の内容よりして、イタリヤに於て、殊にローマでは使節一行に甚だ身近いまたは密接な関係を有ち、従ってその動静には大小となく通じていた人物であろう。然し一行中の人ではなくて、ローマに住んでいてローマは勿論フィレンツェなどの事情にも精通していた教会関係の人と見做して先づ誤りがあるまい。この書の原稿がどのようにしてパオロ・メイエットの手に入ったか、またメイエットがどのような人物か、この書を献呈されたジロラーモ・メルクリヤーレとは何人かということは今は尋ね難い。この二人が耶蘇会以外の教会関係者であり、特にメルクリヤーレはかなり高い地位の聖職者であったろうと推察されるだけである。将来イタリヤに於てこれらの人物の伝を調べることができるならば、それより絲を手繰るようにして著者の名もわかるかも知れない。

以上でこの小冊子の概略を説いた。これらのわたくしの考説を理由として重文の指定が行われたのである。顧るに今から三百六十七年前にローマへ行った大友氏など三大名の少年使節の評判がヨーロッパ諸国に拡がり、従って日本に対する智識が植えられたのは、前述の如く、この往訪を紀念して諸国で出版された数多くのパンフレット様の使節記であり、その最初のものがこの不備不体裁なレッヂオ版の一小冊子であった。それらの諸国で出た使節記はどれも皆、多くは数十冊、少くても数冊が現今に伝存しているのに、その原型となったこの冊子だけは、恐らく出版後間もなく、その発刊されたことをさえ知られずして今日に至り、数年前になって東京国立博物館でその唯一の存在が確認せられたのである。

〔扉〕

聖下に帰服を表せんとて

一五八五年渡来せし
日本の公子等のヨーロッパ
及びローマに於ける旅行
及び到着の記。
ジロラモ・メルクリヤーレ閣下へ〔捧呈す〕
レッヂオに於て
エルコリヤノ・バルトーリ刊
上司の御許しを得て　一五八五年

〔献呈辞〕

ドットーレ・ジロラモ・メルクリヤーレ閣下へ。

聖下の御もとへ帰服を表明するために派遣された日本の公子四人の我が〔ヨーロッパ〕諸国への到着に関するこの記を、予は数日前入手し、且つは〔それを〕刊行に価するものと考えましたので、一般〔民衆〕の稗益のために印刷し、また閣下の御役にたたうとする予の希望を証明し、閣下に対し奉り予の有する敬意のささやかな担保を呈上しようと思いました。さればこれを贈呈する予の衷情を添えて御受納下され、且つは可能な限り偉大な御意志に応じていつもより大きなものを御期待下さるように懇願致します。主が公衆の利益のために閣下を永えに保持し給うことを。
四月二十三日当パドーヴの大学修舎より。

閣下の極めて忠実な僕

パオロ・メイエット

〔本　文〕

日本はイタリヤの三倍程ある一島①にして、四十五年前東印度の彼方へ東西に亘って航海したポルトガルの商人の発見するところであつた。吾が〔ヨーロッパと全じ〕半球中（極へ約三十五度上って）位置するが、直経ではイタリヤに対向している。アシヤの極部即ちキナ若しくはシナ大王国を洗う海中にあり、少くとも横断して〔これより〕八十レーゲ隔たっている。六十三侯領に分たれ、名誉と支配とを甚だしく渇望する民がこれに住む。それ故に王侯は彼等の間でその国を維持し拡大するために不断の戦争をしている。彼等は武器を操従しながら宗教の研究をもする。但しその非常に尊重するのは偽の神々である。さればその諸国にはボンゾーと称する修道者の豪華な僧院（モナステリオ）に満ちわたり、且つボンゾー達の大部分が高貴な人物である。然しその宗教、寧ろいい換えればその迷信が誤謬だらけであるから、幾多の宗派に分れることになり、その間でボンゾー達は真理のために論争しあうて、諸王侯がその侯領のために武器を執るにも劣らず、決して〔帰一〕復元することがない。耶蘇会創立者の最初の僚の一人にして、且つそのうちで東印度へ渡つた第一人たるパードレ・フランシスコ・ザヴィエルが数人の者を伴うて一五四九年にこの島へ入り、福音を説いたときに数多のキリスト教信者を獲給うた。彼の退去と死後にも、その〔布教〕事業を同じ〔耶蘇〕会の人々が継続した。これを援助するため印度やヨーロッパからポルトガル人、イタリヤ人その他の国人の派遣を以て、かの偽りの修道者達及び迫害した多数の諸王侯を介し共通の敵から彼等に対し非常な抵抗が行われたけれども、主たる神（デイオ）はかの隅像崇拝者達の改宗のために有力な御庇護を加えさせられたので、三十年間にしてかの国に二百の聖堂が建設せられ、多数の改宗者も生じて、現に二十万人以上のキリスト教信者がいる。彼等〔信者〕のうちには、我がイタリヤの公爵（ヴーカ）のような大王公や、強大な勢力を有する王もある。今これらの改宗した諸王侯は、真のカトリック信者として、自ら行うこと

ができぬからというわけで、地上に於けるキリストの代理にまします教皇様の許へ大使を送つて、全キリスト教信者が御恩沢を受けているので彼等〔王公〕に代って教皇様に帰服を表明し、〔世界〕普遍のまた各個の父並に牧人〔にまします御方として〕感謝し奉り、且つはこの機会に彼等のアニマの救済に関する恩寵を希求申し上げようと決意した。それは同じ〔会の〕パードレ達から大いに勧告されたからであるが、蓋しその国の貴顕の数人がヨーロッパを視て偉大なキリスト教をも、我が真の信仰が大なる諸王侯の間にあることをも知らしめるためであって、これこそはかの地方の多くの人々の想いもよらぬことであった。かくて、一五八二年に三王公が吾人の述べるこの使命を送ったのである。〔三王公とは即ち〕豊後王ドン・フランチェスコ、有馬王②ドン・プロタジオ及び大村の君ドン・バルトロメオである。この第一〔王〕は、キリスト教信者となって久しくはないが、絶えず福音の弘通を援け、また日本へ行った最初の耶蘇会のパードレ達をその王国に迎えた。第二〔王〕も亦新しいキリスト教信者である。第三〔の君〕は、最初に受洗した重要な男爵（バローネ）であるが、その〔受洗〕は一五六三年のことであった。第一〔の王〕はとりわけ有力にして、〔日本〕六十三国中の七箇国③の主である。その勢力は、一五七九年の戦争④で、四萬〔兵〕が戦場で戦うたことでもわかる。王フランチェスコはいとも誉れあるこの遣使を行うために、その妹と日向王との〔間に生れた〕一子を遣わそうと想うたが、その少年が遠方にいた故と、使節と同行すべき耶蘇会の巡察使であるイタリヤ人パードレ・アレッサンドロ・ワリニャノが航海の適季を失わぬために〔急いで〕出発の準備をしていた故とによって、その少年の従弟であり前記の日向王の甥である今〔正しく〕二十才の少年⑤ドン・マンショを送ることに定めた。それが〔使節の〕首席である。次に有馬王及びドン・バルトロメオの君はその一人の方の従弟であって、他の方の甥にあたるドン・ミケーレを派遣した。それが第二の人物であり且つ使者であるが、今十八才になろう。〔日本でも〕屈指の武士二人の子息がこれに随伴した。その一人は日向国⑥のドン・マルチーノといい十七才程である。他〔の一人〕は肥前のドン・ジュリヤノにして略ゞ同じ年齢である。一方では使節の任務に従い、他方ではローマ教会の信教とキリスト教全般とを視るために、この二人の公子（プリンチピ）と二人の貴士（シニョリ）とは一団の従者を随え、前述した巡察使のパードレその他の人々と一緒に一五八二年の初め頃に出発し、一五八三年にポルトガル

国王に属する印度の首都ゴアへ着いた。そこで〔暫く〕休養してから、ポルトガル船でヨーロッパへ来た。聴罪師としてまた旅行の嚮導者として彼等と伴うて日本を出た日本語を知るパードレ・メスキータというポルトガル人の耶蘇会の一パードレとポルトガル語を知る日本人の一人〔のパードレ〕[8]とが一行に加わって来た。というのは巡察使のパードレが管区長として印度に残留したからである。[9] 一行は一五八四年にポルトガルに着き、その国の総督であるアウストリヤの枢機卿殿下及びその国第一の男爵（バローネ）であるブラガンサ公から限りない懇情と敬意とを以て迎えられた。〔ブラガンサ公は〕彼等を尊重するの餘りに、公の長子に日本風に作った服を着せしめ給い、且つそれを着けたまま彼等に同行せしめようと望ませられた。[10] 旅程を捷らすために大部分の従者をそこに残し、[11] 一行は国王フィリッポ〔陛下〕の御手に接吻し奉ろうとてマドリーへ赴いた。国王からも同じく懇ろに迎えられた。というのは、先ず彼等が遊歩するに役立てようとて〔陛下御用〕の大馬車の二輛を彼等〔の用〕に供し給うた。また国王は彼等に御手を接吻せしめ給うだけで御満足あらせられず、彼等を抱き給うた。内親王御二方も亦彼等を抱くことを望ませ給うた。また陛下の最も快適な御休息処であるエスクリヤル〔離宮〕の如き〔では〕、武具庫、宝石庫、厩舎（カフレリア）のような美々しい物を悉く彼等に観覧せしめられた。王太子の宣誓式にも臨席せしめ給うたが、この式典では彼等に右側の首席を与え、諸貴官の手より手へ宣誓するのをはっきりと認められるようにと二人の高官に彼等に介添えすることを御命令あらせられた。彼等の出発に当っては、乗船地まで行くために馬車一輛、大馬車一輛を供与せしめ給うた。陛下の御許しを得て、一行はアリカンテーラ[7]へ向う途をとった。その通過する到る処で敬意をこめ懇切を極めて迎接され、〔それらの諸都市の〕周壁より貴顕の士達が派手やかに迎えに出で、また一行を楽しましめる競技や祝典が催おされた。アリカンテーラで陛下の御命令により〔出発するばかりに〕準備して、航海中の豊かな食料の積み込まれていた一船に乗ってイタリヤへ向うた。アリカンテーラを発ってから図らずもマヨルカ〔島〕へ寄航せねばならなくなり、ミサを聴くのに下船して充分な休養をとった。それよりは順調に航走して、三月一日二万哩餘の〔長途の〕航海の後に、トスカーナ〔大公国〕の港であるリヴォルノへ無事に着いた。そのときピーザに滞在し給うたトスカーナ大公は彼等の到着を聴いて、大公の馬車一輛、大馬車二輛に一行を載せ、大

公と一緒に謝肉祭を過すように招請せよと御命令になつた。一行はこの招請を諾い、先づリヴォルノ城とファナーレの美塔とを観てから、ピーザへの途に就いた。途中で出迎えに来たピーザの寡なからぬ数の貴顕の士に逢うた。彼等は一行を、〔大公〕殿下の御命令で準備し、立派に装飾された館へ導いて行った。館では大公の近習達が世話をした。晩餐後に、知事ドン・ピエトロ・デ・メディチ殿の訪れがあったが、知事は常にドン・マンショに上席を譲った。一行は同時に司教座聖堂(ヴォオモ)の聖遺物を見舞わうと希望したが、このような彼等の信仰に民衆は驚嘆した。夕べアヴェ・マリヤの後にスキス人護衛兵と数多の松明を持った紳士とに随行されて、一行は三輛の大馬車で、日本風に豪華な服装をして大公を往訪した。大馬車から下りると不意に門の傍へ大公の御兄弟二人がお出迎えになった。階段の半ばへ〔大公〕殿下が見えられた。〔殿下は〕そこで彼等を親しみをこめて抱擁遊ばされた。彼我両方の鄭重な挨拶の後で、ドン・マンショの手をとり給うた。第一の門と第二の門を入るとき〔殿下は〕彼に先頭を譲ろうと望ませられた。〔また〕大公妃が公女達と共にいらせられる御室へ御案内下さった。大公妃は彼等四人を皆御抱擁になった。そこで大公は先づドン・マンショを着坐せしめ給い、御自身はその傍に席を御とりになった。そうして次々に日本の公子達が〔着席し〕その後にドン・ピエトロ〔殿〕が席に着かせられた。暫らくは彼我両方の鄭重な応酬にまた一公女のヴィオラに合せてモテトを歌い給うのに、また日本服の材料と工程とを知ろうと熱望せられる大公妃の御心を満たすのに費された。一行が退出するときには大公は門まで伴い給うた。また少したって大公妃は一行に三鉢の糖菓を贈らせられ、大公は一行に、四旬節の第一日までは御自身と共に過されたい、その日には大公のカヴリエリと一緒に聖灰の祝典を挙げようと請わしめ給うた。一行はこの御招請を応諾したので、それまでの間は大公が一行を鳥猟に御案内になったり、その他の名のある遊楽をするように御はからいになった。聖灰の朝には、〔昔の〕教皇様にして殉教者にましました聖(サン)ステファーノの聖堂即ち〔サン・ステファーノ・ディ〕カヴリエリに属する〔聖堂〕へ一行は導かれた。そこでは左方にはグラン・マエストロすなわち大公の御ための玉座が設けられていたので、大公はそれに着坐あらせられた。これに向いあうて日本の公子四人のための〔席が〕設けられていたので、一行はそこへ案内せられた。紅色の繻子で裏を付けた白い長い外套を着、胸に紅色の十

字架を帯びたサン・ステファーノ〔会〕の騎士達は一人づつグラン・マエストロの御前へ参じて帰服を表明した。次いで騎士達のうちの一人がグラン・マエストロと日本の公子達とに聖灰を齎らした。式典が終るとその聖堂にある聖遺物及その修道会の宝物を一行に観覧せしめ給うた。それからまた一行を導いて前述の騎士達の館をも一覧させ給うた。それらのものを視て一行は感動し、〔殿下が〕大公と称ばれ給うのは尤もであると語つた。月曜日鉾兵三十人に随行されて一行はフィオレンツァへ向うて発った。〔フィオレンツァの〕市外二哩にして数多の貴顕の士の出迎えを受けた。耶蘇会のパードレ達の聖堂で下車したが、そこには数限りもない民衆が集まっていた。前述のパードレ達のコレジオにいらせられた教皇聖下の使節〔閣下〕も一行を御来訪になった。

旅行中は〔何処でも慣わしと〕した如く、〔嘗て故国に於て〕彼等に洗礼を授けてキリストの信仰を与えたそれらの〔耶蘇会の〕パードレ達と〔生活を〕共にすることを一行は熱く希望し、そこに宿泊しようとしたが、大公の大臣達はそれを許容しなかった。されば再び大馬車に乗り、宮殿へ赴いて泊ることになった。宮殿でフィオレンツァに住む限りのあらゆる貴紳の訪問を受け、またこの市の大司教にまします枢機卿様からも一司教を御見舞に遣わされた。礼儀に外れぬようにとて、食事の後急かに彼等は大司教様を往訪し、大司教様より贈物として極めて上出来の御告げの聖母の画、象牙の十字架像、神の羔の函を受けたが、この神の羔は彼等の大いに珍重するところであった。それより一行は宮殿に於て前記の枢機卿様と優雅な青年であるヴィルジリオ・オルシーノの君との御訪ねを蒙った。この〔青年の〕優美と賢明と〔巧みな〕会話とによって、彼と一緒に聖人フランチェスコ〔ディ・アシジ〕の外套を拝観に赴いたときに大いに心満されたのである。フィレンツェにいた五日間に市内外の立派な物を総て、諸殿館、プラトリーノなどのような諸庭園、メディチの文庫、大公妃の礼拝堂、諸聖堂、聖遺物類を、とりわけ貴い容器中に保存されている夥しい数の〔物を〕サン・ロレンツォの聖堂に於て観た。その聖堂では一つの興味あることが起った。というのは或る聖遺物がサン・ミケーレと名付けられていたので、ドン・ミケーレは喫驚し、予の教えられた如くならば天使達が身体を有たぬ〔筈だ〕が、どうしてここにその骨があるのだろうかと述べたからである。然しミケー

レと称ぶ殉教者の遺物であると説明せられて彼は納得した。四旬節の第一日曜日には、キリスト教信仰の祝祭日の〔数ある〕うちでも殊にこの日を忘却せずして彼等を嚮導したパードレ・メスキータによって告解し聖体を受けた。〔それは〕信仰が彼等の心中に立派な根をおろした大きな徴しである。

フィレンツェを出発するときには大公は一貴顕に一行に随行するように命じ給い、その領内は何処でも、〔一行のために〕費用を負担し、接待を盡すべきを御命令あらせられた。三月十四日にはシェーナに到った。その市の貴顕や軍人の出迎えがあり、大司教様も亦門外半哩へ〔出でられた。大司教様〕の御前で一行は馬より下り、大司教様と一緒に大馬車へ入った。慣例の通りに耶蘇会のコレジオに宿るつもりであったが、知事より強いて〔請われたので〕その官邸に宿泊した。司教座聖堂（ドオモ）へ案内され、楽音のうちに大司教様に迎えられ、聖（サン）ジョワンニ・バッチスタの御腕やその他の聖遺物を拝観し、恭々しくそれに接吻した。邸へ帰るとき、耶蘇会のパードレ達の聖堂を訪れたいと望んだ。その聖堂でも同じように聖遺物を拝観した。以上のことで一行の示した敬虔な〔態度〕は人々を非常に驚かせた。翌日は耶蘇会の人々からミサを聴き、そこに残って晩餐を共にした。それよりローマへ向うて進発した。〔教皇〕聖下は一行が近づいていることを御聞きになって、二度の郵便で到着を御督促になった。そのわけは、土曜日には公の枢機卿会議（コンチストーロ）を、日曜日には〔聖下の〕礼拝堂を一行のために開き、御告げの日である月曜日には一行を随えてミネルヴへ臨御あらせられるために、土曜日のプリマ〔日の出より三時間のこと〕にはローマに一行が来ているようにと〔御考えになったからである。〕到着する二日前に聖下は兵士と軽騎隊とを、次いで馬車をも出迎えに御派遣遊ばされた。金曜日々没頃正々堂々と一行はローマへ入った。それは三月二十二日のことであった。聖下の御承認を受けて真直ぐに耶蘇会の修舎へ行って下車した。一行を悦こばすために御寛容にも〔会の〕総長へそれを御許しになったのであろう。このときこの広場（ピアッツァ）には夜間にも拘らず実に夥しい人々が集まっていたので、心安く下車するのに軽騎隊だけでは門に近づく馬車の通り路をつくるのには不充分な程であった。総長が補佐の方々や数多のパードレと共に門の傍に御出になり、松明の輝きに照らされて一行を親しげに御迎えなさった。一行は御前に来ると地面に届くまで跪いて総長に敬礼をした。それよ

り、後から押し込んで来る群集と共に聖堂へ導かれた。そこでは戸を閉めて、コレジオ・ジェルマニコの聖職者達がいとも快い楽音に合せて二重合唱でテ・デウム・ラウダムスを歌うたが、〔その〕間公子達は四つの褥の上に極めて敬虔に跪いていた。彼等の一人が熱病を患うていたにも拘らず、皆首を彼方此方へ動かすとか、何かに椅るとかいうことをしなかった。それはその〔場にいた〕パードレ達やその他の方々を驚嘆させ、慰悦の餘りに流涕を抑えることができぬ程感動させた。感謝〔の礼〕が終ると、黄金〔塗りの〕革でしつらわれ、親密の人を招くのに造られた絹の寝台のある居室へ導かれた。〔一行により大きな慰安を与えるのに天帳で覆うた数台の寝台でパードレ・メスキータも〔起居を〕共にするのを希望したので、皆一緒に留る〔ことになった〕一つの広間である。〕そこで後述の如く、パードレ達はその聞きわける数箇国語で一行を再び歓迎したが、公子等は却って、こんなにも数多くの耶蘇会のパードレ達に会うたことを、このパードレ達から受けた懇切極まるもてなしを悦んだ。翌朝早くスパーニャの大使が大馬車で公子等を迎えとり、ポポロの門外にある教皇ジュリオの園へお連れになった。王公や枢機卿様方や大使達がローマへ御いでになるときに、〔先づ〕ここへ入園せられるのを慣わしとしたのである。ドン・ジュリヤノは熱病に罹っていて、同僚達と一緒に騎馬で公式の入市をすることができないので、〔スパーニャの〕大使の大馬車で〔外側を〕覆うて秘かに我が主君〔教皇様〕の御足を吻うためにサン・ピエトロへ運ばれた。〔教皇様より〕非常に懇切に迎引せられたが、この少年は枢機卿会（コンシストーロ）を拝観するのにそこに残りたいとの希望を漏らすと、聖下は彼の苦痛を御推察遊ばされて、この度は帰れ、そうして健康に留意せよと宣い、これに次の言葉を添え給うた。「子よ、予は汝と協議し、汝の考えを聴くのに、〔後に〕汝のために、再び枢機卿会議を催すであろう。」と。他〔の公子〕達は、慣わしの如く、地面に届く〔程長い〕ブラチェテーロの外套を着、頭に帽子を冠り、腰には銀の鞘におさめた劍を帯びて、サン・ピエトロへ向うた。先頭には騎士達とスキス護衛兵が進み、紫色の馬衣を着た騾と共に枢機卿様方の列が、また〔諸国の〕大使の従者達が来た。次いで教皇様の吏員（カメリエリ）達が、通常の紅の服を着た聖庁の職員達と共に追続し、更に聖座の聖職者達が来た。その後に直ぐ、前述したように服装した公子達が黒ビロードの覆布と黄金の馬具のある立派な馬に跨り、一人毎に六人の馬丁に囲まれて進んだ。第一〔の

公子〕は二人の大司教様に挟まれ、他の二人は、各別に二人の司教様の間に連れ立っていた。その後に無数の騎馬の人々が〔続いた〕。総じてこの〔ような行列〕はローマ上流階級の精華であった。〔かくして〕一行が騎馬して聖庁へ向うていた間に、教皇様は、有力な王公や大使の迎接にあたる〔慣わしの〕枢機卿会（コンナストーロ）へ御出ましになった。枢機卿会ではこの上なく周到な警衛が行われた。〔然し〕何処も、枢機卿様方の御椅子の間や教皇聖座の階段さえ人の群で満ち亘っていたから、枢機卿様方が御席へ着かれるのにもひどい御苦労をなさった。教皇様は、ぎっしりと重なり合うた司教様方や聖職者達が絶えず息づまる〔ようにして〕いらせられる聖座へ御上りになる前に、戸のそばで暫らく御留まり遊ばされた。この間に、日本の公子達が〔進行して〕カステロ〔サンタンジェル〕を通過した際には、ローマも沈んでしまうかと想える程祝砲が頻発された。聖下が聖座に着御遊ばされて少し後に、一行は群集の間を〔分けて〕現れた。枢機卿様方は皆これをよく御覧になるために御起立になった。彼等は恭敬謙譲をつくし〔た姿〕で教皇様の聖座に近づき、御足を吻い奉り、彼等の王達から受けて来た使命に従い、御足を頭上に頂こうとしたが、教皇様はそれを諾い給わずして、やさしく彼等を抱擁し、一人々々に二度づつ御接吻遊ばされた。或いは驚嘆し、或いは歓喜するの餘りに〔臨席の〕人々悉くの得た感動が如何に大きかったかは言葉では悉せない。これ程大切な人物の、このような年若い少年の、かの有力な王達より派遣されて三年の旅を経て来た使者を驚嘆したのであった。ヨーロッパからはまことに遠く離れた〔国の〕人々が、その一族のうちでも極く血の若い少年を、彼等にとって異国の貧しい不知の耶蘇会のパードレ二、三人に委ねたのを驚嘆したのであった。そうして、これと同時に、これらの事実によって、とりわけ遣使の目的よりして、〔少年達を〕派遣したその諸王公の強固な信仰心、〔即ち〕キリストを信ずる敬虔〔な心〕を説いて歓喜を新たにし、それ故に〔また〕人々は更に感激し、悦こびの餘りにやむなく落涙する方々も寡くはなかったが、その一人は我が主君〔教皇様〕であり、また幾人もの枢機卿様方〔もその数のうちに〕あった。最初の接見の儀が終ると聖下は通訳を介して彼等と暫らく語り給い、それから彼等の王公の書翰が捧呈せられた。それは彼等の国の風に巻き込まれ、函に入れて封じてあった。先づ日本語で読み上げ、次いでイタリヤ語に訳された。ここにそれを掲げないのは、ラテン語にして已に印刷された

からである。[12] 三書翰共に要旨は次の通りである。第一に耶蘇会のパードレ達によって神の真の教のうちに照されるに到ったことを感謝し、聖下の従順な子となって、〔世界〕普遍の父または牧人として〔聖下に〕感謝し奉る。第二に老齢と戦争とのため、彼等の何を措いてもと渇望している通りに、聖下の御足を頭上に頂くのに親しく渡来できぬことの宥恕を請うた。最後にその他の委細に就いては彼等の肉親である使節の口より申し上げるところに委ねる〔とのこと〕。〔聖下が御前に〕彼等に贈物として巡察使を以て特に豊後王[13]に御送りになった聖遺物画即ち神の羔（アニュス・デイ）に就いて感謝したことである。そうしてそれらの書翰は皆一五八二年一月に認められていた。書翰を読み終ると、〔公子等は〕使節の席へ退き、そこに帽子を脱したまま起立した。ポルトガル人である耶蘇会のパードレ・ガスパーロ・ゴンサーレスはラテン語の口演をしたが、この全枢機卿会議（コンシストーロ）を満足させるものであった。それ故に、或る枢機卿がそれを印刷するに盡力せられたが、後に日本の諸王の書翰をも一緒にして世に出された。[14] その要旨は以下の通り。第一に、かの新しいキリスト教信者の初果を賓らしたその遣使を聖下が如何に悦こばせ給うかを述べた。第二に使節を送った諸王の地位を説明した。最後にかの〔国の〕民の改宗を推進するに就いて下された御配慮を聖下に感謝した。口演が済むと、聖下はセクレタリオのボッカパヅリ様を代理としてラテン語で二十五語を応答せしめ給うたが、その内容は、この来使が聖下にとって悦こばしいものであり、また彼等を子として承認することなどであった。それより聖下は〔枢機卿会から〕自室へ退出遊ばされたが、その際御外套の裾を公子達が捧持するように御希望あらせられた。それこそは慣例では〔ローマの〕都にいる第一位の男爵（バローネ）がなし奉る〔程の〕恩典であつた。〔その後に公子等は〕聖庁内でサン・シストの枢機卿様から食事にお招きを受けた。豪奢な饗宴をなし給い、グァスタヴィラーニ枢機卿様とジャコモ・ボンコンパーニャ様も御臨席になった。この〔枢機卿様〕方は、公子達の言動、特に礼儀に叶うた喰べ方と彼等の慎重な応答とに驚嘆し且つ御満足になった。食後聖下のところへ参上すると、聖下は通訳を介して彼等と暫し語り給うた。その後退いてサン・ピエトロの聖堂を訪ね、最早夕方になったので耶蘇会の修舎へ休息のために帰った。日曜日朝聖下より〔聖下の〕礼拝堂でミサを拝聴す

るようにと招請された。然しいささか疲労しているので、〔耶蘇会〕総長は彼等のために寛恕を御願いなさった。月曜日即ち御告げの日には、慣例に従い、百二十八人に上る乙女を結婚させるために聖下はミネルヴへ御出ましになり、彼等も〔ローマ〕入市の日〔と同じ〕服装で色どりの多い日本服で参上した。〔そして〕最も名誉ある即ち教皇様の直前にある席に着いた。〔使節の〕首席二人は教皇様に白衣を捧げ、第三〔の使節〕は聖堂に入るとき首席枢機卿様と同伴した。この日が過ぎると枢機卿様方、大使達その他の貴顕の来訪が始ったが、一行は何方にも充分な満足を与えた。また方々から招待されたけれども、教皇様は、彼等が〔そのために〕健康を損うてはいけないと〔御心使い〕あらせられて、それに応ぜぬように御命令になった。然しジャコモ様だけには拒ることができなかった。蓋し〔ジャコモ様は〕城内で賛美をつくして〔一行のために〕御饗宴になったのであるが、彼等は後に答礼に参上した。またローマの諸聖堂その他の靈地を参観した。

最早〔紙数も盡きようとするから〕頗る重要にして且つ驚嘆すべき三つのことを述べるに留めよう。〔即ち〕ローマ〔全市〕の普ねき喜悦、公子達に就いて聖下の有し給う父の御配慮及び公子達の信仰行状などである。第一のことは彼等の到着の日に、既述の如くジェズーの広場（ピヤツツア）へ夥しい数の民衆が集まったので、彼等が辛うじて馬車から下りた程〔市民の歓迎が〕盛大であった。次には、彼等が正式の入市をしたときには、ローマじゆう〔の人々〕が彼等の通過する諸街路に競い集まり、窓々は婦人で満ち亘った。そうして同じ〔日の〕夕方一行の修舎へ帰るときにも、大馬車に覆いをかぶせて来たにも拘らず、彼等を見たいと希う数多の人々が後から追いすがり、またミネルヴへ赴いた日には、入市の日のそれよりも数多い民衆が再び一行〔の姿〕を見ようとして競いあうた。そうして全市〔民〕は〔公子等のこと〕より他は話さなかった。その上ローマの元老院議員は、護民官及びローマの法官と共に、慣用のうちでも最も華やかな〔装い〕をして来訪し、公子達を元老院全員の名に於てローマの貴族として認めた。その他にもキリスト教信者である〔一行中の〕他の日本人達を市民となし、黄金塗の書面に〔認めた〕特許状を彼等に与え、カンピドリオに彼等〔の名〕を書き留めることを約束した。それ故にそこ〔カンピドリオ〕には、未だ曾てローマに於て見たことのない〔このような遙かに〕遠い〔国より来た〕使節の不滅の紀念〔碑〕が造られると

の噂である。聖下の彼等に示し給うた父のそれよりも深い御配慮と御懇情とは数多の事実のうちに見られた。その故は、第一には毎日ビヤンケチ貌下やその他の方々を彼等の見舞に御派遣になり、彼等を泊めている〔耶蘇会の〕パードレ達には、〔彼等の〕日常の出費を御供与遊ばされ、また或るときは彼等を喚び寄せ、御前に坐せしめ給うて、彼等と種々のことを語り、御殿の陳列廊、御書斎、御所有のあらゆる美しい物の拝観を御許しになった。〔聖下〕はまた諸礼拝堂にも、公の行事にも彼等の出席を望ませられ、彼等の故に〔それらの行事は〕常よりも盛大に行われた。彼等の到着して少し後に数々の絹の反物を彼等へ贈らせ給うたが、蓋し彼等がイタリヤ風の服装をするため彼等の気に入ったのをそれより選ばせようと御はからいになったのである。且つ今までに彼等のためその一人毎に服二着を作らしめ、またその他の服をも御下命あらせられた。その一着は黒ビロード製にして、これに黄金のレースの付いた地面まで届く外套が添えられ、他の一着は緞子製にして金の総付きの同じ〔緞子の〕下袴と極めて体裁のよい金の結び紐あるビロードの帽子が付いている。それら〔の服〕に三千スクード餘を御支出遊ばされた。そして今や彼等はこの新しい服をつけて聖下の御前へ参上する。〔聖下〕はまたパンや円菓子やその他これに類する彼等の食物をさえ贈らせ給うた。ジャコモ様も企様の懇情をお示しになり。また何方様も皆彼等及び日本の諸王への立派な贈物を整えなさった。なお病中のドン・ジュリーヤノに対して〔聖下の〕なし給うた御心使いの程も格別であり、且つは信じ難い程のものであった。医学校を御設置になっていたから、御自ら御指名になって医者六人をして彼を見舞わしめ給い、医者全員の満足を以て彼の病状の報告を毎日求め給うた。なお処方箋にはローマの重な医者達に署名せし給うた。その上毎日〔使いを以て〕彼を見舞わしめ、また〔聖下の〕薬局を彼のために御供与になった。〔こうして今や〕神の御庇護により彼〔の病状〕は危険の域を脱した。

飜って〔いえば〕公子達の示したキリスト教の信仰と敬虔とは甚だ大きなものである。蓋し前迹の如く、四旬節の第一日曜日には、フィオレンツァで遊楽していたときでも、聖体を拝領するのを忽にはしなかった。祝祭毎に慣わしとして行う告解のときは、二時間も心の準備をした。また美しい敬虔な聖像を飾った室に住んでいる。なおまた自ら鞭韃するのを習いとし、聖

遺物を非常に尊崇し、好んでこれを拝見した。このことは彼等の旅行中を通じて努めて行うたところである。自ら歓んで耶蘇会のパードレ達と行動を共にした。またできる限りはパードレ達と一緒に泊った。

聖下に対し奉っては、キリストの御名代としてこれを崇敬することが最も厚かった。されば或る日聖下の御前に着席するように御招きを受けたときには、聖下の御前ならば一生涯でも疲労を覚えぬでしようと答えた。なお罹病中のドン・ジュリヤーノが同僚〔三人〕に前だって秘かに教皇様の御足を吻いに参殿したときにいうには、祝福を頂戴すれば癒ることでしようし、若し死ぬとしても、今より一層満足して死ぬでしようと。

彼等の身体に就いて〔いえば〕背丈は低く、オリーブ色にして、眼は小さく、瞼は厚く、鼻はその尖の方で稍々拡がっている。然し相貌は素朴にして貴品がある。そして少しも髯を生やしていない。態度は礼節に叶い、鄭重にして謙譲である。彼等だけの間では〔互いに〕敬意を払い、外出するにも同じ順序を常に守っている。食事は控え目にして拘泥せず、給仕されるのを待たずに喰べる。食するにつつましくて清潔である。パンの外は手に触れない。葡萄酒を飲まぬが、日本の習慣に従い、微温湯をとる。而かも通例は食事の終りに一度飲むだけである。彼等だけで食事をするときは、象牙のように白い尖鋭な長さ一パルモの棒〔箸〕を用い、右手の三指の間に支え、それを以て遠方の〔物〕でも非常に堅〔い物〕でも、その欲する食物を巧みに取る。病気中でも衣を着けて寝る。機智と老巧な慎慮と非常な怜悧とを有する。聖職者と語るには極めて慇懃であるからイタリヤで教育を受けた如くに見える。彼等はその視る物総てに意を留めるが、非常に驚くということはない。蓋しそこに大きな高い精神が現われるのである。彼等はポルトガル語に精通し、スパニヤ語に普通に、ラテン語はその大部分を知っており、イタリヤ語も確実には話さぬけれども殆んど皆理解する。されば王公と交わるときには彼等の国語でいい、通訳者を介する。チェンバロ、ギタラ、リーラを能く奏し、〔彼等の〕修舎にこれらの楽器を有っている。撞球に興じ、また舞踊をも知っている。日本での花鳥その他の動物や各種の図柄を以て頗る美しく織られた琥珀織、紋絹のような甚だ軽快な絹物を身に着けている。また薄い軟かい或る革製の一つの拳のうちにある半靴を穿っている。それは染色されて沢があり、恰も絹製のようである。

唯一の口があってそれを紐で結ぶ製品である。その靴の下部は、親指〔だけ〕が分かれて他の指が皆接合する手袋のようである。カプシン会修道者の靴の如くで、踵がなく、端が尖っている。上面から〔見れば〕[15]、指の端を辛うじて被うている唯一の紐があるだけだから、それを穿いては歩くことができぬように思われる。彼等は絹の長い服を着るが、それは踵に届く長さがあり、末端まで接合している海員〔服〕のように作られたズボン下に挿し入れられ、〔この両方が合して〕一続きのようである。そうしてそのようにして細紐の上で服を結びつけるが、〔上下を合せて〕唯一つの服になって見える[16]。その外に我が〔国の〕兵士の如く右肩の上、左腕の下にかなり広い絹の帯を着ける。イタリヤにいるときは頭に帽子を冠る。然し日本では何も冠らない。降雨と日照りのときに路〔を歩く〕には日傘を以て身を防ぐ。佩剣は極めてよく鍛えてある。何故なら、彼等の間では、どんなに堅固な甲冑をも切断できぬような刀が尊重されないからである。聖下並に他の方々へ贈呈するために、その国の種々の品を携帯した。美しい製作の祭壇壁掛、籐の一種〔で作った〕[17]小函即ち硯箱であって、銀製よりも珍重されている。聖下へ捧呈した物のうちに、ナブンナガという日本の首都を描いた丈二尋[18]、長さ四乃至五尋の絵画がある。

トスカーナ大公には、〔大公のもとを〕辞去する際に次の物を贈ったと聞いている。光沢ある黒色の且つ頗る芳しい硯箱、或る樹の皮で作った紙二枚に彼等の言葉で神と聖母の御名を書いたもの、喫驚する程薄い籐で作った紙二枚、人頭程の〔大きさの〕生絲のガレタ[19]及び彼等慣用の衣服一着。

彼等はナポリへ[20]、次にはロレートへ、更にヴェネチヤへ赴き、それよりその国へ帰るということだが、彼等の国へ布教に赴こうとして非常に勇み立っているかなり多数の耶蘇会のパードレ達を同伴する〔という〕。キリスト教の盛大と、〔教皇〕聖座及びヨーロッパの信仰の荘厳に就いての消息を彼等が携行し、あらゆるキリスト教王公から受けた好遇を語るならば[21]、彼等の帰国〔後〕に大きな改宗が期待されることである。

（終り）

註① この当時ではヨーロッパでは未だ日本全国土に就いては知られてゐなかった。このような記事は勿論架空の不正確な情報によるところであったから、この種の地理上の誤記が生じたのである。恐らく、日本の使節達自身が日本の地理に就てどの程度の知識を有ってゐたか、極めて怪しいものであろう。この他にも地理上の誤謬と知られるものがあるが、一々に就いてはここに指摘しない。

② Ré di Arina と綴ってあるけれども、Arina が Arima の誤植と見做すべきである。

③ 大友宗麟は、その盛時には本拠たる豊後の外に、豊前・筑後・肥後・日向の一部を併有してゐたから六箇国の主といへる。本書に見える如く七箇国とすれば、肥前をもこれに加へてゐたのであろう。さうして、この少年使節の長崎を出発した一五八二年には已に勢力を失墜して、日向・肥後を失ひ、筑後も彼の羈絆を脱しやうとしてゐたのである。

④ 日向に於ける島津氏との対戦を意味するのであらうが、この戦争は一五七九年ではなく、一五七八年に耳川の戦ひでその大勢が定まってしまうたのである。

⑤ 伊東マンショは出発の年に十三歳であったから、この一五八五年には、十六歳でなくてはならない。そして千々石ミゲールも仝歳、原マルチーニュも仝歳、中浦ジュリヤンが十七歳であったから、本書の記事は誤ってゐる。恐らく本書の著者がその受けた印象によって年令を推定したのであらう。

⑥ 原マルチーニュも、中浦ジュリヤンと仝じく肥前の士であった。日向といふのは誤りである。

⑦ Alicantera となってゐるけれども、Alicante の誤植である。仝じ頁に正しく Alicante としてゐるところもある。

⑧ ここには一人としてあるのは、一人のパードレの意味である。然し日本人ジョルジ・ロヨラは一行のイタリヤ滞在中はイルマンであった。パードレに昇叙されたのはその後ポルトガルへ帰ってからエヴォラの大司教によったことである。

⑨ メスキータとロヨラとの二人はその始めから一行に加はってゐた。ヴリニーャノが印度に残ることになって、代りに同行したのはヌーノ・ロドリ!ゲスであった。

⑩ ブラガンサ公テオドシオはこの時十六歳で未だ結婚してゐなかった。日本服を着けてみたのは、その弟ドアルテであった。ドアルテは坐興として日本服を着けただけのことで、使節一行に仝伴しやうとしたのではない。ここにも誤った情報が見られる。

⑪ リスボアに残ったのは一行中のイルマン・ジョルジとコンスタンチーノ二人の日本人である。専ら印刷術を修得するためであった。ここにも誤記がある。

⑫ Acta Consistarii Publicee exhibitia S. D. N. Gregorio Papa XIII. Regum Iaponiorum Legatis Roma 1595 の出版を意味する。この小冊子だけは三月末に印刷に付せられ、この書の作られた四月六日頃までには既に刊行されてゐたのである。（九州三侯遣欧使節行記三六〇頁註29、三六二頁註48参照）

⑬ 原文では「特に豊後王に」に当る語が前行の「彼等の肉親である使節」の次に来てゐるから、よく意味がとれない。恐らく本書の印刷を急いだので、一行を前後する誤植をなしたものと認めて、訳文ではここへ挿入した。

⑭ 註⑫に記載した小冊子である。

⑮ これは足袋の説明である。イタリヤ人にとっては如何にも珍らしかったので、このようなまはりくどい説明をしたのであろう。

⑯ これは袴を着けた和服姿の説明である。

⑰ 篠の一種といふのは竹のことである。

⑱ 一尋は二米二糎に当る。

⑲ ガレタは菓子の名であるが、実際には異常に大きな繭であった。

⑳ 使節一行は四月には、その旅程としてローマの次にナポリが予定されてゐたことは確かである。然し、グレゴリオ十三世の逝去とシスト五世の選出などの行事のためにローマ滞在が意外に暇どり、六月初旬まで出発することができなかった。されば暑気の酷いナポリを避けることになったといふ。その他にもナポリで騒乱があったことも、ナポリ行をやめた一理由であったらしく思はれる。（九州三侯遣欧使節行記、五〇三頁註8参照）

㉑ 以上の①より⑳までの註は特に留意すべきことだけを指摘したのである。記事の内容を克明に註解すれば、甚だ多くの添註を要する。時間の余裕もないからその煩を厭ふたが、読者は岡本良知訳註九州三侯遣欧使節行記（昭和十七年刊）を併せて読まれるなら、その方の不足を充分に満たすことができる筈である。

念のために、ことわっておかねばならぬのは、この書の内容が総てイタリヤ語の文であるから、個有名詞を、イタリヤ以外のものでも例外なくイタリヤ語の音に従って仮名書きしたこと、原書に行を改めてない大部分の記事には、訳文でもその通りに改行しなかったことである。